インドラの網

宮沢賢治

そのとき私は大へんひどく疲（つか）れていてたしか風と草穂（くさぼ）との底（そこ）に倒（たお）れていたのだとおもいます。

その秋風の昏倒（こんとう）の中で私は私の錫（すず）いろの影法師（かげぼうし）にずいぶん馬鹿（ばか）ていねいな別（わか）れの挨拶（あいさつ）をやっていました。

そしてただひとり暗（くら）いこけももの 敷物（カアペット） を踏（ふ）んでツェラ高原をあるいて行きました。

こけももには赤い実（み）もついていたのです。

白いそらが高原の上いっぱいに張（は）って高陵産（カオリンさん）の磁器（じき）よりもっと冷（つめ）たく白いのでした。

稀薄（きはく）な空気がみんみん鳴っていましたがそれは多分は白磁器（はくじき）の雲の向（むこ）うをさびしく渡（わた）った日輪（にちりん）がもう高原

の西を劃る黒い尖々の山稜の向うに落ちて薄明が来たためにそんなに軋んでいたのだろうとおもいます。
私は魚のようにあえぎながら何べんもあたりを見まわしました。
ただ一かけの鳥も居ず、どこにもやさしい獣のかすかなけはいさえなかったのです。
(私は全体何をたずねてこんな気圏の上の方、きんきん痛む空気の中をあるいているのか。)
私はひとりで自分にたずねました。
　こけももがいつかなくなって地面は乾いた灰いろの苔で覆われところどころには赤い苔の花もさいていま

した。けれどもそれはいよいよつめたい高原の悲痛を増すばかりでした。

そしていつか薄明は黄昏に入りかわられ、苔の花も赤ぐろく見え西の山稜の上のそらばかりかすかに黄いろに濁りました。

そのとき私ははるかの向うにまっ白な湖を見たのです。

（水ではないぞ、また曹達や何かの結晶だぞ。いまのうちひどく悦んで欺されたとき力を落しちゃいかないぞ。）私は自分で自分に言いました。

それでもやっぱり私は急ぎました。

湖はだんだん近く光ってきました。間もなく私はまっ白な石英（せきえい）の砂（すな）とその向うに音なく湛（たた）えるほんとうの水とを見ました。

砂がきしきし鳴りました。私はそれを一つまみとって空の微光（びこう）にしらべました。すきとおる複六方錐（ふくろくほうすい）の粒（つぶ）だったのです。

（石英安山岩（せきえいあんざんがん）か　流紋岩（りゅうもんがん）から来た。）

私はつぶやくようにまた考えるようにしながら水際（みずぎわ）に立ちました。

（こいつは過冷却（かれいきゃく）の水だ。氷相当官（こおりそうとうかん）なのだ。）　私はもう一度（いちど）こころの中でつぶやきました。

全く私のてのひらは水の中で青じろく燐光を出していました。

あたりが俄にきいんとなり、

(風だよ、草の穂だよ。ごうごうごうごう。)こんな語が私の頭の中で鳴りました。まっくらでした。まっくらで少しうす赤かったのです。

私はまた眼を開きました。

いつの間にかすっかり夜になってそらはまるですきとおっていました。素敵に灼きをかけられてよく研かれた鋼鉄製の天の野原に銀河の水は音なく流れ、鋼玉の小砂利も光り岸の砂も一つぶずつ数えられた

のです。

またその桔梗(ききょう)いろの冷(つめ)たい天盤(てんばん)には金剛石(こんごうせき)の劈開片(へきかいへん)や青宝玉(せいほうぎょく)の尖(とが)った粒やあるいはまるでけむりの草のたねほどの黄水晶(きずいしょう)のかけらまでごく精巧(せいこう)のピンセットできちんとひろわれきれいにちりばめられそれはめいめい勝手(かって)に呼吸(こきゅう)し勝手にぷりぷりふるえました。

私はまた足もとの砂(すな)を見ましたらその砂粒(すなつぶ)の中にも黄いろや青や小さな火がちらちらまたたいているのでした。恐(おそ)らくはそのツェラ高原の過冷却湖畔(かれいきゃくこはん)も天の銀河(ぎんが)の一部(いちぶ)と思われました。

けれどもこの時は早くも高原の夜は明けるらしかっ

たのです。

それは空気の中に何かしらそらぞらしい硝子（ガラス）の分子のようなものが浮（うか）んできたのでもわかりましたが第一（だいいち）東の九つの小さな青い星で囲（かこ）まれたそらの泉水（せんすい）のようなものが大へん光が弱くなりそこの空は早くも鋼青（こうせい）から天河石（てんがせき）の板（いた）に変（かわ）っていたことから実（じつ）にあきらかだったのです。

その冷（つめ）たい桔梗色（ききょういろ）の底光（そこびか）りする空間を一人の天が翔（か）けているのを私は見ました。

（とうとうまぎれ込（こ）んだ、人の世界（せかい）のツェラ高原の空間から天の空間へふっとまぎれこんだのだ。）私は胸（むね）

を躍らせながら斯う思いました。
天人はまっすぐに翔けているのでした。
(一瞬百由旬を飛んでいるぞ。けれども見ろ、少しも動いていない。少しも動かずに移らずに変らずにたしかに一瞬百由旬ずつ翔けている。実にうまい。)私は斯うつぶやくように考えました。
天人の衣はけむりのようにうすくその瓔珞は味爽の天盤からかすかな光を受けました。
(ははあ、ここは空気の稀薄が殆んど真空に均しいのだ。だからあの繊細な衣のひだをちらっと乱す風もない。)私はまた思いました。

天人は紺いろの瞳を大きく張ってまたたき一つしませんでした。その唇は微かに哂いまっすぐにまっすぐに翔けていました。けれども少しも動かず移らずまた変りませんでした。

（ここではあらゆる望みがみんな浄められている。願いの数はみな寂められている。重力は互に打ち消され冷たいまるめろの匂いが浮動するばかりだ。だからあの天衣の紐も波立たずまた鉛直に垂れないのだ。）

けれどもそのとき空は天河石からあやしい葡萄瑪瑙の板に変りその天人の翔ける姿をもう私は見ません

でした。
（やっぱりツェラの高原だ。ほんの一時のまぎれ込みなどは結局あてにならないのだ。）斯う私は自分で自分に誨えるようにしました。けれどもどうもおかしいことはあの天盤のつめたいまるめろに似たかおりがまだその辺に漂っているのでした。そして私はまたちらっとさっきのあやしい天の世界の空間を夢のように感じたのです。
（こいつはやっぱりおかしいぞ。天の空間は私の感覚のすぐ隣りに居るらしい。みちをあるいて黄金いろの雲母のかけらがだんだんたくさん出て来ればだんだん

花崗岩に近づいたなと思うのだ。ほんのまぐれあたりでもあんまり度々になるととうとうそれがほんとになる。きっと私はもう一度この高原で天の世界を感ずることができる。）私はひとりで斯う思いながらそのまま立っておりました。

そして空から瞳を高原に転じました。全く砂はもうまっ白に見えていました。湖は緑青よりももっと古びその青さは私の心臓まで冷たくしました。

ふと私は私の前に三人の天の子供らを見ました。それはみな霜を織ったような羅をつけすきとおる沓をはき私の前の水際に立ってしきりに東の空をのぞみ

太陽の昇るのを待っているようでした。その東の空はもう白く燃えていました。私は天の子供らのひだのつけようからそのガンダーラ系統なのを知りました。またそのたしかに于闐大寺の廃趾から発掘された壁画の中の三人なことを知りました。私はしずかにそっちへ進み愕かさないようにごく声低く挨拶しました。

「お早う、于闐大寺の壁画の中の子供さんたち。」

三人一緒にこっちを向きました。その瓔珞のかがやきと黒い厳めしい瞳。

私は進みながらまた云いました。

「お早う。于闐大寺の壁画の中の子供さんたち。」

「お前は誰だい。」
右はじの子供がまっすぐに瞬もなく私を見て訊ねました。
「私は于闐大寺を沙の中から掘り出した青木晃というものです。」
「何しに来たんだい。」少しの顔色もうごかさずじっと私の瞳を見ながらその子はまたこう云いました。
「あなたたちと一緒にお日さまをおがみたいと思ってです。」
「そうですか。もうじきです。」三人は向うを向きました。瓔珞は黄や橙や緑の針のようなみじかい光

を射(い)、羅(うすもの)は虹(にじ)のようにひるがえりました。
そして早くもその燃(も)え立った白金のそら、湖(みずうみ)の向うの鶯(うぐいす)いろの原のはてから熔(と)けたようなもの、なまめかしいもの、古びた黄金、反射炉(はんしゃろ)の中の朱(しゅ)、一きれの光るものが現(あら)われました。
天の子供らはまっすぐに立ってそっちへ合掌(がっしょう)しました。
それは太陽(たいよう)でした。厳(おごそ)かにそのあやしい円(まる)い熔けたようなからだをゆすり間もなく正しく空に昇(のぼ)った天の世界(せかい)の太陽でした。光は針や束(たば)になってそそぎそこらいちめんかちかちかち鳴りました。

天の子供（こども）らは夢中（むちゅう）になってはねあがりまっ青（さお）な寂静印（じゃくじょういん）の湖の岸硅砂（きしけいしゃ）の上をかけまわりました。そしていきなり私にぶっつかりびっくりして飛（と）びのきながら一人が空を指（さ）して叫（さけ）びました。

「ごらん、そら、インドラの網（あみ）を。」

私は空を見ました。いまはすっかり青ぞらに変（かわ）ったその天頂（てんちょう）から四方の青白い天末（てんまつ）までいちめんはられたインドラのスペクトル製（せい）の網、その繊維（せんい）は蜘蛛（くも）のより細く、その組織（そしき）は菌糸（きんし）より緻密（ちみつ）に、透明清澄（とうめいせいちょう）で黄金でまた青く幾億互（いくおくたがい）に交錯（こうさく）し光って顫（ふる）えて燃えました。

「ごらん、そら、風の太鼓（たいこ）。」も一人がぶっつかってあ

わてて遁(に)げながら斯(こ)う云(い)いました。ほんとうに空のところどころマイナスの太陽ともいうように暗(くら)く藍(あい)や黄金や緑(みどり)や灰(はい)いろに光り空から陥(お)ちこんだようになり誰(だれ)も敲(たた)かないのにちからいっぱい鳴っている、百千のその天の太鼓は鳴っていながらそれで少しも鳴っていなかったのです。私はそれをあんまり永(なが)く見て眼も眩(くら)くなりよろよろしました。

「ごらん、蒼孔雀(あおくじゃく)を。」さっきの右はじの子供が私と行きすぎるときしずかに斯う云いました。まことに空のインドラの網のむこう、数しらず鳴りわたる天鼓(てんこ)のかなたに空一ぱいの不思議(ふしぎ)な大きな蒼い孔雀が宝石製(ほうせきせい)の

尾ばねをひろげかすかにクウクウ鳴きました。その孔雀はたしかに空には居りました。けれども少しも見えなかったのです。たしかに鳴いておりました。けれども少しも聞えなかったのです。

そして私は本統にもうその三人の天の子供らを見ませんでした。

却って私は草穂と風の中に白く倒れている私のかたちをぼんやり思い出しました。

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店
1996（平成8）年4月25日初版発行
1996（平成8）年6月20日再版発行
底本の親本：「【新】校本宮澤賢治全集　第九巻　童話Ⅰ」筑摩書房
1995（平成7）年6月発行
入力：浜野智
校正：浜野智
1999年1月31日公開
2011年2月15日修正
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。